

大江健三郎の核時代観と W・H・オーデン

— 深瀬基寛訳のオーデン「支那のうへに夜が
落ちる」の受容 —

高橋 由貴

はじめに

僕たちが言い続けているのは、核戦争を回避して生き延びることを望む思想です。いま確かに危機は大きく、絶望も深い。しかし文学の仕事で核戦争の危機を乗りこえる、それができることを望むということです、人間の再生があると考えています。^①

大江健三郎の核をめぐる発言は、従来政治的な評価軸による検討がなされることが多い^②。確かに、政治性がつきまとう核への言及はどうしても聴き手に発言に対する賛否を誘発してしまう。しかし、そのメッセージ性の強い発言の是非を問う前に、まずは右に記されたような大江固有の世界観・時代観を見直すことは必要であるだろう。本稿では、大江健三郎の核時代観に、オーデン

「支那のうへに夜が落ちる」という詩が参与していることを明らかにし、大江の核時代観に改めて考察を加えてみたい。

一、大江健三郎の核時代観

大江健三郎は「核の大火と「人間」の声」と題された講演において、「核時代を生き延びる」という言葉について次のように述べている。

その「生き延びる」という言葉、*outgrow* という動詞は、私はオーデンらしい特別な言葉だと考えていますが、さきのジョン・アーヴィングの小説でも三箇所使われていました。「……すなわち頭をふさいでいる状態があつて、その上にあるものを突き破つてゆくように成長する。自分が現にあるところから、その苦しみや困難というものを引き受けてかつ乗り越えていくというのが、*outgrow* ということだと思ふのですね。この言葉について私は、オーデンをつうじてずっと考えてきました。／＼といえますのは、われわれの文学というものは、現代のような気違いじみた状態から人間がなんとかして生き延びていく、そういう道をひとりひとり発見してゆくのを目ざす試みだろうと思うからです。むしろそれが広く現代の学問、芸術の目的だろうと思うからです。^③

ここでは、「生き延びる」という語が「オーデンらしい特別な言葉」を抛り所としていること、さらにこの語は「核時代」の文

学を方向づけるものであることが示されている。右の文章からは、一九六〇年代以降に訪れた冷戦構造下の核時代観およびこの時代における文学的営為の根幹には、オーデン W.H. Auden の詩が深く関与していることがうかがわれる。

大江の作家としての始発に、深瀬基寛訳『オーデン詩集』（筑摩書房、一九五五・六）の受容が強く関与していたことは疑いない。弛緩した日常と「危険の感覚」との境界不分明な戦後日本、そこに生きる「戦争に遅れてきた世代」の主体を形象化する初期小説のモチーフは、オーデン「見るまえに跳べ（Leap Before You Look）」の冒頭、「危険の感覚は失せてはならない／道はたしかに短かい、また険しい／ここからみるとだから坂みたいだが。」という一節に依拠したものであった。この戦後日本の形象化は、その後も危険と泰平との危ういバランスの上に立つ冷静構造下の日本を象る大江小説の中心的なモチーフとして、小説の根幹に据えられていく。こうして、第一期と呼ばれる一九五八〜六四年までの大江は、オーデンの詩を摂取することで、政治と内面心理とを同列に語る「政治と性」という独自の方法を作りだし、冷戦構造下の日本に生きる読者の情緒を攪拌する小説を次々に発表していった。⁴⁾

ただし、この時期のエッセイ等で示される戦後の「危険の感覚」は、決して核兵器による世界終末戦争の危機を含意するものではなかった。大江が核戦争の危機について明確な発言を行うのは、ソビエト・ヨーロッパ旅行記『ヨーロッパの声・僕自身の声』（毎日新聞社、一九六二・一〇）からである。これは、ベルリン危機とそれに続くキューバ危機を経て核戦争が現実味を帯びてくる世界

情勢に対応したものである。「モスクワの核実験再開の波紋のなかで、僕は結局憂鬱症にかかっていたのだ」（同書125頁）、「明日の戦争をふせぐための今日の核実験、というかれら（*ソビエトの人間のこと…引用者注）の論理と、核実験はすでに今日の戦争である、という僕の論理はあいられない」（同書、176頁）という記述に見られるように、大江は核実験を「今日の戦争」と捉え、その認識が社会に広く受け入れられない事実に強い危惧と恐怖とをあらわしていた。そして、この「核実験はすでに今日の戦争である」というヨーロッパに届かない「日本人だけの認識」の根拠として、被爆地・広島とそこに生きる被爆者の「声」が、『ヒロシマ・ノート』（岩波新書、一九六五・六）において見定められていく。この時、一九六〇年代の世界情勢を「核時代」と捉え、広島の人々を人間疎外の現代における「モラリスト」と見据える際に、深瀬基寛訳のオーデンの詩、「支那のうへに夜が落ちる（Night Falls on China）」の一節がクローズアップされるのである。

それは小さな冗談のようなイメージから始まってグロテスクな、あるいはエロティックなエピソードが続くけれども、しだいにアメリカの社会全体をとらえている大きい病気の状態、狂気の状態というものが表現されてゆく。その主題は確実にたわわつてくるのであります。そしてこういう傾向は、アメリカの作家たちを広く覆っているように思います。（…）
もっとも、アメリカ文学の世界でも、地球全体について、それがなんとか生き延びていかなければならないということを考える人たちは、最近のゲイリー・スナイダーにいたるまで

とくに詩人に多かったと思うのです。これはイギリスに行つてしまったアメリカ人ですが、オーデンという大詩人がいます。オーデンが、一九三〇年代に、つまりスペイン戦争があり中国への日本軍の侵略がはじまつていたころに、『支那のうへに夜が落ちる』という詩を書きました。いま世界中に呻き声が聞こえてくる、スペインから、人間の苦しんでいる声が聞こえる。中国からも聞こえる、というような詩です。そのなかで、「人間」の聲が次のようにいう、彼は大文字で MAN の声というふうに書きますが、すなわち人類の聲が聞こえてくる。《「人間」の聲——「われらの狂気を生き延びる道を教へよ》という詩です。これはエリオットやオーデンの秀れた研究者である、京都大学の深瀬基寛先生の翻訳です。⁶⁾

大江は、アーヴィング、ヴォネガット、スナイダーといったアメリカの文学者たちが「アメリカの社会全体をとらえている大きい病気の状態、狂気の状態」を表現するという同じ主題を共有していると指摘した上で、ここで深瀬基寛訳でオーデンの詩の一節《「人間」の聲——「われらの狂気を生き延びる道を教へよ》を引用する。この一節は、「狂気を生き延びる道を教へよ」という形で中篇小説およびそれを表題作にした小説集のタイトルとしても採られており、大江においてこの一節は、評論と小説のいずれとも強く結びつく形で意識されている。右の文章に即すなら、この一節が、アメリカ文学が共有していた「社会全体」の「大きい病気」や「狂気」を描き、さらにこの現代の「狂気の状態」とそれに抗する「人間」の声」との対比をくつきりと浮かびあが

らせるものであるためだと考えられる。

では、なぜ大江は、オーデン「支那のうへに夜が落ちる」をとりわけ《「人間」の聲——「われらの狂気を生き延びる道を教へよ》という一節を、一九六〇年代以降の自らの文学の支えにしていくのだろうか。このような疑問を、まずはオーデンの詩を深瀬基寛訳で確認することから考えていきたい。

二、深瀬基寛訳のオーデン「支那のうへに夜が落ちる」

Night Falls on China

Night falls on China: the great arc of travelling shadow / Moves over land and ocean, altering life: / Thibet already silent, the packed Indias cooling, / / Inert in the paralysis of caste. And though in Africa / The vegetation still grows fiercely like the young, / / And in the cities that receive the slanting radiations, / / The lucky are at work, and most still know they suffer / / The dark will touch them soon: night's tiny noises / Will echo vivid in the owl's developed ear. / / Vague in the anxious century's, and the moon look down / On battlefields and dead men lying, heaped like treasure, / On lovers ruined in a brief embrace, on ships / / Where exiles watch the sea: and in the silence / The cry that streams out into the indifferent spaces, / And never stops or slackens, may be heard more clearly / / Above the everlasting murmur of the woods and rivers, / And more insistent than the lulling answer of the waltzes, / Of hum of printing presses

turning forests into lies; / As now I hear it rising round me
from Shanghai; / And mingling with the distant mutter of
guerrilla fighting; / The voice of Man : O teach us to outgrow
our madness. / Ruffle the perfect manners of the frozen heart, /
And once again compel it to be awkward and alive. / To all it
suffered once a weeping witness. / Clear from the head the
masses of impressive rubbish; / Rally the lost and trembling
forces of the will, / Gather them up and let them loose upon the
earth, / / Till, as the contribution of our star, we follow / The
clear instructions of that Justice, in the shadow / of Whose
uplifting, loving, and constraining power / All human reasons do
rejoice and operate.

支那のうへに夜が落ちる

支那のうへに夜が落ちる、渡りゆく蔭の大きな弧光が／いの
ちを変じつつ、陸にも海にも移りゆく／チベットはもう黙つ
てしまつた、缶詰され印度は冷めてゆく／世襲の麻酔に萎
えてゆく。アフリカではまだ／植物は少年のやうに猛烈に生
殖し、／斜めにさす発光を浴びる都市では／運のいい奴は
仕事にありつき、たいていはまだ苦痛を感じてはゐるのだが
／まつ黒い夕闇がやがて膚を刺すだらう。夜の細かい物音は
／みみづくの尖つた耳には尖鋭にこだまし、／心配さうな
番兵の耳には鈍感にこだまし、／戦場と、宝みために累積し
た死んだ兵隊と、／抱擁のまんなかで崩れてしまつた恋人に
月がさす、／月は船から海を眺めてゐる流し者にも照り、

／冷淡な空間に流れていつて絶えもしない、ゆるみもしない
泣声は／沈黙のなかではいちばんはつきり聴き取られる、／
／森と川とのいつまでも絶えないつぶやき声のうへに、／ワ
ルツの眠たい答へよりもつとつと執つく／森林を嘘に
一変する印刷機のうなりのうへに、／ああ聞えてくる、わた
しのまはりに上海から涌き上る／ゲリラ戦の遙か彼方のつぶ
やき声と入り交つて／「人間」の声——「われらの狂気を生
き延びる道を教えよ」。／凍つた心臓の完全な礼節を掻き
むしれ、／もいぢど心臓に無作法と血の気を強制せよ、／心
臓が患つたすべての悩みのため泣きながら証言せよ。／案
山子みたいながらくたを頭のなかから掃除せよ、／慥気を顛
ふ意志の失踪兵を集結せよ、／あいつらを掻き寄せて地球の上
に解き放て、／ああ。あの日のきたるまで、われらかの「大
義」の透明なる教へを踏み、／われらを高め、慈しみ、曳き
ゆきたまふ大いなるかの力の影に立ちて／人間われらの正し
さが悉く歡喜し発効し、／われらの星からの贈物となる日のき
たるまで。

オーデンが中国を訪れた翌年一九三九年に出版された詩集
Journey to a War (『戦場への旅』)に収められたこの詩は、スペイ
ン内乱、ヨーロッパにおけるファシズムの擡頭、日本の中国侵略
といった社会情勢の中で書かれた。まさにこの時代の暗さが「夜
が落ちる (Night falls on China)」という表現として呈示される。ヨ
ーロッパを覆う影は、中国、アジア、そしてアフリカへと拡がり、
そこに住まう人々の皮膚を刺戟するように降り注ぎ浸透し、夜の

言葉ならぬ物音は地上に響きわたる。影がもたらす闇は、その地に沈黙 (silence) と冷却 (cool) を引き起こし、人々は階級という軌によって自力で抵抗できずにいる (Inert in the paralysis of case)。このような近代文明人の麻痺状態が、アフリカで猛烈に繁殖する植物の健康的で野生的な生長のイメージとの対比で呈示されている。その沈黙の中を流れる呻き声とともに聞こえる「人間」の声 (The voice of Man) が、末尾にイタリック体で置かれている。前半に示された萎縮した個人に対し、末尾の十一行では、「人間」の覚醒を希求する力強い呼びかけと、それが宇宙を調和に導くというヴィジョンとが描かれていく。このようにこのオーデンの詩は、先の大江の発言に見られた「小さな冗談のようなイメージから始ま」り「社会全体をとらえている大きい病気の状態、狂気の状態」を表現するという主題に連なるものだとと言える。この詩にはオーデン特有の文明諷刺と本来あるべき人間性の回復と正しさを切願する内容とが備わっているのである。

深瀬基寛の訳詩の特徴は様々あるが、特にイタリックで書かれた部分に傍点を施した、「人間」の声の内容が語られる箇所工夫が見られる。命令形の部分は、読み手への強い呼びかけを喚起する「よよ」を採用している。また《Till, as the contribution of our star》の部分については、まず「ああ」という詠嘆と「あの日」という語を先に呈示し、「あの日」の内容である「われらの星からの贈物となる日のきたるまで」という語をこの詩の締めくくりに配した。また《MAN》を鉤括弧付きの「人間」とし、また大文字で始まる正義の女神としての《Justice》を鉤括弧付きの「大義」と表し、「くたまふ」という敬語を添えながら「大義」が「人間

われら」を導く「大いなる力」「教え」であることが強調されている。このことは、D・H・ロレンスとW・ブレイクからの影響を受け、「直感と理性とを分離せしめ、人間を消極的に倒錯せしめる意志を悪として捉へる」⁶⁾ことを特徴とするオーデン詩の理解に基づいており、深瀬は人間の意志によって形作られる「かの力の影」を抑制するものとしての「大義 (Justice)」を意識して訳していることが判る。さらに《the contribution of our star》に「われらの星からの贈物」という訳語が与えられたことによって、その差し出し手である「地球」に住まう「人間われら」の能動的な行為がより際立たせられている。

大江は、オーデンの詩を解釈する際に、かなりの部分を深瀬の訳業に負っているのは間違いない。その証左として、オーデンのこの詩の最後の四行について、大江は次のような発言を行っている。

そのスター、われわれの星に Justice、大文字でオーデンが書くジャステイス、「大義」というものがある。それは様々な正義をふくみこんだものでしょうが、やはり地球に「大義」というものがある。その「人間」の「大義」が、われわれのこの地球という星からの、ほかの星の生物への贈物となる日がかなければならぬ。それに対して、ところが、いまはそれどころか、地球のなかでわれわれは争い合って、スペインでも上海でも呻き声が湧きおこっている。「人間」の声が聞こえる。われわれの狂気を生き延びる道を教えよ、という詩なのです。⁷⁾

ここで大江は、深瀬が強調する、「人間」の高みに位置する「様々な正義をふくみこんだ」「大義」を正しく読み取っている。様々な地域や人々の様を同時に見る宇宙からの視座を取り、いつか来るべき日に、その様々な「正義」を含みこんだ「大義」が樹立されなければならない。「大義」の樹立こそが「贈物」となり、「人間」が「ほかの星の生物」という他者との間に関係を真に形成しうるものとなる。このような大江の詩の解釈は、深瀬の訳業に準拠したものであるだろう。とりわけ「大義」が核時代に生きるわれわれ「人間」にとつて倫理的な意味を帯びたものとして立ち現れるのは、深瀬が施した訳詩の特徴から読み取られたものである。

さらに、原詩が持つ、人間を抑制し停滞させる「狂気」が地表を覆う様と、野生の獍猛さと健康さが生長 (grow) するイメージとの対比を受けて、論文の冒頭で挙げたオーデンの《outgrow》^④ についての大江の解釈が成立している。「頭をふさいでいる状態があつて、その上にあるものを突き破つてゆくように成長する」「自分が現にあるところから、その苦しみや困難というものを引き受けてかつ乗り越えていく」という大江の解釈は、低く立ちこめる「狂気」を垂直に超える上昇のニュアンスを受けたものである。加えて、《outgrow》^⑤ が「生き延びる」と訳されることで、未来へ向かう時間的なイメージが付与され、他の星と取り結ぶべき未来へ投射される倫理的な「正しさ」の発露がここで大江に強く意識される。このように、「生き延びる」と訳されるオーデンの《outgrow》^⑥ の持つ垂直性という空間的イメージと未来を指した

時間的なイメージは、「ほかの星の生物への贈物となる日」の到来という深瀬訳を媒介として導き出されているのである^⑧。

オーデンが、個人の心理的な内部疾患と社会的な疾患とを複合して詩を書いていることは周知の通りである。工藤昭雄はその著書において、「視覚に映ずる目前の荒廃でなく現代の精神地図」を描き出しており、「建設的要素のかけに破滅的要素を(…)光のかけに暗黒を同時に発見してしまふ二重の視覚」で以て現代という状況を捉え、「人間の精神内部の変革による救済」を希求する点がオーデンの詩の特徴であると述べていたが^⑨、この詩もまさにそのような「真に人間的なもの」を成就する「人間と宇宙との調和を作り出す」(工藤^⑩) 様を描くオーデンの特性をよく表している詩である。深瀬が「評解」で参照している『オーデン序説』でも、ホガートはオーデンを「モラリスト」と呼び、機械化された社会に生きる「人間の意識」に関心を寄せ、それによつて社会変革への願望を綴るのだと指摘した^⑪。これらの評論が指摘するように、現代の荒廃そのものではなく、そのような歪んだ環境によつて歪められた人間性を描き、さらに人間性の回復を目指すオーデンの詩の主題が、大江の黙示録的終末観の中で捉えられる「人類」のイメージと重ね合わされている。「生き延びる」という語が、災厄や核戦争を切り抜けて生きる survive ではなく、旧来の状態から脱したり成長したりするという原義から派生している outgrow^⑫ でなければならぬのは、この状態を「乗り越え」、人類の回復や人間のモラルを強くイメージするような論理に基づくのである。

以上、オーデン詩の持つ主題と方法とが深瀬の訳詩によつて一

層強調されることで、大江においてこの詩が重要な位置を占めるに至ることを確認してきた。では、さらにこの詩の「狂気」が大江のフランス文学の師である渡辺一夫の「ユマニスム」という概念と結びつくことで、この時期の大江文学を方向づけていくことを見ていきたい。

三、オーデンと大江健三郎の「ユマニスム」

渡辺一夫は「狂気について」⁽³⁾において、「狂気」とは「自分のどこかが工合が悪い、どこかが痛む」という「己の有限性」の自覚を持たない・自覚を忘れた人間の精神状態という独自の定義を提出し、「感動とか感激」や「興奮状態」には、「荒唐と犠牲とを伴う」「狂気」が萌しており、この「誰しもが持っている「狂気」を常に監視して生きる」ことを説いていた。

しかし、人間というものは、「狂気」なしには居られぬものでもあるらしいのです。我々の心のなか、体のなかにある様々な傾向のものが、常にうようよ動いていて、我々が何か行動を起す場合には、そのうようよ動いているものが、あたかも磁気にかかった鉄粉のように一定の方向を向きます。そして、その方向へ進むのに一番適した傾向を持ったものが、むくむくと頭をもたげて、まとまった大きな力のものになるのです。そのまま進み続けますと、段々と人間は興奮してゆき、遂には、精神や肉体もある歪み方を示すようになります。その時「狂気」が現れてくるのです。幸いにも、普通の人間

のエネルギーには限度はありますし、様々な制約もありますから、「狂気」もそう永続はしません。興奮から平静に戻り、まとまって、むくむく頭をもたげていたものが力を失い、「狂気」が弱まるにつれて、まとまっていたものは、ばらばらになり、またもとのような、うようよした様々な傾向を持つものの集合体に戻るのである。／そして、人間は、このうようよした様々なものが静かにしている状態を、平和とか安静とか正気とか呼んで、一応好ましいものとしていますのに、この好ましいものが少し長く続きますと、これにあきて憂鬱になったり倦怠を催したりします。そして、再び次の「狂気」を求めるようになるものらしいのです。この勝手な営みが、恐らく人間の生活の実態かもしれません。／「…」／十六世紀のエラスムスという大学者は、『痴愚神礼讃』*Encomium Moriae* という諷刺書を綴りました。これは、「狂気」をほんとうに讚美したものでなく、「狂気」にとりつかれてそれを自覚せず、自他の「狂気」のおかげで甘い汁を吸っている様々な人間が、「狂気」の女神を礼讃せざるを得ないという趣旨で書かれた皮肉な人間諷刺書です。／エラスムスの書物は、十五世紀末から十六世紀前半にかけてのヨーロッパ社会への諷刺ですが、現代社会にも我々一人一人にもあてはまるところがあります。十五・六世紀の昔から、今日にいたるまで、洋の東西を問わず、「狂気」の帝国は健在であるからでしょう。健全で正気な生活を送っているつもりの方々が、感動とか感激とか呼んでいるものの中には、常に「狂気」の翳がさしていることが多いのですし、われわれは「狂気」に捕らえら

れてもそれを知らず、且つまたそれから甘い汁を吸って、人生を謳歌することは、古今東西を通じて見られることかもしれないませぬ。

ここで渡辺は、「狂気」を「病患」と重ねた上で、「まとまった大きな力」になろうとする「興奮」が人間の精神と肉体に「歪み」や「まひ」をもたらす状態こそを「狂気」の状態と規定していた。渡辺はまた、「狂気」を身体や精神の「歪み」ととらえ、この「歪み」が十五世紀末から現代に至る社会的な問題となつていることを述べている。

「病患」を「己の自然」と捉えてこの「病患」や「狂気」を拒絶する渡辺一夫の考えは、社会的疾患と個人の心理的な内部疾患を「狂気」として呈示し、その「狂気」が人間に麻痺や歪みをもたらすといったオーデンの詩に呼応するものである。とりわけ「支那のうへに夜が落ちる」は、地上を広く覆う文明の「暗闇」や「影」を「われらの狂気」として描き、文明社会に生きる「人間」の歪みと不幸とを鮮烈なイメージで描き出しており、渡辺一夫の定義する機械化された文明に生きる人間の「狂気」と近似したものであると言える。一九六〇年代、「核時代」下で人間の恢復と再生を希求するといった発言は、これら大江が依拠する渡辺一夫の「狂気」の定義と、そこから探求される人間回復を希求する「ユマニスム」との文脈の中で捉えていくべきであるだろう。

大江が早くからサルトルをはじめとするフランスを中心とする二十世紀のヒューマニズムに傾倒していたことは自他によって度々言及されてきた事実である。大江は核時代について発言する際、

渡辺一夫の訳したサルトル「大戦の終末」の一節、「人類がいまや自分自身で死滅しつくすかもしれない可能性を、核兵器の出現によつてそなえた以上、死滅するか、あるいは自分自身を救助するかは、人類の日々の選択の問題だ」という言葉を幾度となく引用している。同じ時期から、大江は、フランス・ユマニスムを現代日本に移入しようとした人間として渡辺一夫を引き合いに出して「核時代」を論じる。例えば「核時代のエラスムス」⁽¹³⁾というエッセイでは、「核時代」における「人類」の営為について次のような発言がなされている。

ぼくが結局は人類が核時代を生きのび、ごきぶりよりはましな次の世代に文明をひきつぎうることを信じる勇氣をもつのは、中世の暗黒から宗教戦争につづく数しれぬ戦争が、ついに核兵器による戦争へと至る歴史をつくりあげていると同時に、おなじくひとつの確かな歴史として、エラスムスからラップ(*アメリカの核物理学者のこと；引用者注)に到るような、「人間自身の狂おしさや愚かさ」をよく知った人間の、ユマニストの営為が決してとだえはせぬことを知っているからである。

「核時代を生きのび」て「次の世代に文明をひきつぎうること」を信じる勇氣」という大江の発言には、オーデン「支那のうへに夜が落ちる」の詩句が確かに響いているだろう。『痴愚神礼讃』の訳者でもある渡辺一夫を媒介として、大江はこのように、中世・ルネッサンスと核時代とを「暗黒」の時代として重ね合わせ、ま

たエラスムスと同時代のモラリストとを「ユマニスト的営為」によつて結びつけている。大江は、このようにオーデンを、渡辺一夫の説くユマニズムへと結びつけながらより深く理解し、あるいは独自の解釈でもつて大江的な核時代のユマニズムのあり方を探求したのである。「人間」の「声」に重きを置くオーデンの詩句は、人間を疎外する核時代において、人間性を回復しなければならぬというサルトルをはじめとする二十世紀のヒューマニズムへと接続され、大江独自のユマニズム探求という主題を導いていく。

以上、渡辺一夫に依拠する大江のユマニズムの探求に、深瀬訳のオーデン「支那のうへに夜が落ちる」の詩、とりわけ後半の詩句が結びつくことと、社会的な感覚と心理的な感覚とを複合したオーデンの視点とが、大江の考える核時代のヴィジョンとして一致することを確認してきた。換言すれば、大江がオーデンの詩句を下敷きに核時代観を形成していく根幹には、詩を社会化し、現代においても古びないオーデンの詩と、それへの理解と称揚とに基づいた深瀬の訳業、それらに触発されるように大江が現代においてユマニズムのあり方を模索していくという姿勢が存していたのだと言えるだろう。

社会的な疾患として核の脅威が世界を覆い、冷戦構造下において局地的な争いが継続する中で、我々「人類」は、文明の「狂気」に頭まで漬かっている、しかしその核の脅威がもたらす「苦しみや困難」を「引き受けて」「乗り越え」ようとすると「声」、「頭をふさいでいる」「狂気」のような核の脅威を「突き破」り、未来に向けて「正し」き道を歩むことを希求する「人間」の「声」こそが切実に求められる——大江健三郎が深瀬訳のオーデンの詩か

ら導き得た核時代観とは、このようなヴィジョンに他ならない。そして、この「人間」の「声」に合致するものとして見定められたのが、『ヒロシマ・ノート』をはじめとする大江のテクストにおいて中心化されてきた、「真に広島的な人間」である。「真に広島的な人」とは、「最悪の絶望、いやしがたい狂気の種子が胚胎するところに生きつづけている、決して屈服しない人々」⁽¹⁴⁾、「決して絶望せず、しかも決して過度の希望をもたず、いかなる状況においても屈服しないで、日々の仕事をつづけている」⁽¹⁵⁾「モラリスト」⁽¹⁶⁾であった。大江の言う「真に広島的な人」という「モラリスト」の内実は、まさに核の脅威という「狂気」の中で「屈服」しない人間という、オーデンの詩を受容する中で定義されたものであったのである。

おわりに

ここまで、大江の核時代をめぐる発言、そこで頻出される「生き延びる」という語には、深瀬基寛訳のオーデンの持つヴィジョンが密接に関わっていることを明らかにしてきた。survive⁽¹⁷⁾ではなくoutgrow⁽¹⁸⁾に由来する「生き延びる」という発語は、社会的疾患たる「狂気」や「困難」を「引き受け」「乗り越え」て正しい次の段階へ移行するという、現代におけるユマニズム探求という大江独自の主題を基底としているのである。

そもそも深瀬こそが、オーデンがこの詩を書いた第一次世界大戦後の状況と、原爆や水爆を抱えた第二次世界大戦後の現代とを重ね合わせる発想を有していた。

ところで訳者がかねがね考へてゐることは、極東のわれわれにとつては第二次世界大戦後のわれわれの体験が彼等（*オーデンを中心とし、ルイスを含むこの時代の詩人グループのこと；引用者注）の第一次世界大戦後の体験にはるかに密接に対応するといふ点である。原爆や水爆やその他の国際政治の問題は西洋も東洋も問題としてが同時的である。（…）といふのは詩そのものがつねに年代記を無視するところのプロテウス的転身変貌の原理だからである。ルイスのこの本が極東のわれわれの現在の体験にとつて無数の適応点をもつのはこの観点から眺めてのことである。⁽¹⁷⁾

このように深瀬は、第一次世界大戦を経てなお詩を書き継いだオーデンの詩に、「年代記を無視」し、第二次世界大戦後の核時代の現在においても有効な「無数の適応点」を見いだしていた。ある「英文学の教師かつ翻訳家」から深瀬訳は取るに足らないという「アカデミックな教示」を与えられた際、大江は「僕にとつて問題の局面はそうした段階をこえている」のであつて、自分が「深瀬基寛博士によるオーデン訳の一行、一行に、博士の生涯の精神と感受性をかけた苦闘」を読み取つているのだと強く反発したエピソードを語っている⁽¹⁸⁾。大江はまさに深瀬訳からオーデンの「精神と感受性」を受容し、主題を二〇世紀のアメリカ文学の中に位置づけ、さらに渡辺一夫の「ユマニスム」と接続させることによって、一九六〇年代の日本に生きる自らの「核時代観」を、深瀬同様に「苦闘」しながら形成させていったのである。

一九六九年、大江は、「僕自身の詩のごときものを核とする三つの短編」と「オーデンとブレイクの詩を核にする二つの中篇」をまとめた小説集『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』（新潮社）を刊行する。前者は、この時期に集中して読んだ多様なアメリカ文学を受容した小説であり、後者は、ブレイクとオーデンといった英詩を小説の方法レベルで受容した中篇である。例えばこの著書のプロローグで披瀝される大江の「詩のごときもの」の一つ「核避難所^{シェルター}のモーゼ」に、オーデンの詩の響きを取り取ることができるだろう。

核爆弾と人工衛星とが撒きちらす／放射能の灰とラジオ光線の毒とに／ありとある市　ありとある村の／人間　家畜　栽培物が浸蝕される時／森におこつてゐるのは驚くべき／生命の更新である。森の力は強まり／ありとある市　ありとある村の／衰弱は　逆に　森の回復である。／放射能の灰とラジオ光線の毒こそは／樹木の葉と地面の草と湿地の苔に／吸収されて「力」となるからだ。／樹木と草の葉が炭酸ガスに殺されず／酸素を生むことを見よ／核時代に生き延びようとする者は／森の力に自己同一化するべく　ありとある市／ありとある村を逃れて　森に隠遁せよ！

「毒」という禍々しきを含む「光線」と「灰」とが地上を広く覆い動植物が「衰弱」する様が、森における「生命の更新」や「回復」と対比され、「生命の更新」が「力」と結びつけられていく。また末尾では、この「森の力」への「同一化」を目指して人々に

「くせよ！」という呼びかけがなされる。「ここに、「いのちをまじつつ」地上に「夜が落ちて」至るところを覆う暗闇と「発光を浴びる都市」の様、あるいは「少年のやうに猛烈に生殖」する植物との対比で示される動植物の萎縮する姿、「力」を背景に「くせよ」と呼びかける箇所等、確認してきた「支那のうへに夜が落ちる」の特徴がうかがえる。その一方で、「くせよ！」という強い呼びかけで語られるのは、「逃れて」「森に隠遁」というオードンの詩とは異なる事態である。忘れてならないのは、これは決して「詩」ではなく「詩のごときもの」であるという、大江自身の規定であり、十分に詩たりえないものであることが意図的に付与されていた。大江のこの方法的な自己言及は、オードンの詩を受容しつつも、響きにおいても表現においても、オードンの詩を散文的に脱白させた試みを明かしている。『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』では、このような「詩」をずらした「詩のごときもの」を起点として、オードンの詩のイメージを、核時代下の日本へと移して小説化する大江健三郎の小説家としての面目躍如とした創作活動が展開される。

このように、「生き延びる (survive)」という語を中心とした幅広いアメリカ文学の受容や、酔いながら被害妄想や夢のイメージを積み重ね、しかしそこから覚醒する語りを織り込んでいく「醒・酔のあいだの刃渡り」(深瀬) というオードンの詩の手法の受容は、この『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』において先鋭的に方法化され、第Ⅱ期の文学的営為として結実していくのである。

注

- 1 大江健三郎「増大した核戦争の危機回避へ(人間再生)の思想を生かさう」(『毎日新聞』夕刊、一九八三・六・二三)。
- 2 例えば團野光晴「ヒロシマ・ノート」とナシヨナリズム一六〇年代と大江健三郎の問題」(『昭和文学研究』一九九九・一二)等。
- 3 大江健三郎「核の大火と「人間」の声」(京都大学法学政治学セミナー大会講演、一九八一・一二・五)。引用は『核の大火と「人間」の声』(岩波書店、一九八二・五) 17頁。
- 4 この点については拙稿「大江健三郎における深瀬基寛訳『オードン詩集』の受容——「政治と性」の淵源としてのオードン——」(『比較文学』第五三巻、二〇一一・三)参照。
- 5 大江健三郎「核の大火と「人間」の声」注1前掲書。
- 6 深瀬基寛『オードン詩集』(筑摩書房、一九五五・六)、153頁。なお、この言葉の定義は、深瀬が訳したC・D・ルイス『現代詩論』(一九五五・六)の一節を受けたものである。
- 7 「核の大火と「人間」の声」注1前掲書。
- 8 大江がオードンの詩の持つ垂直性を理解していることは、オードン「短詩」の冒頭の一節「できたら、垂直的人間を／尊敬しようじやないか。／われわれは、水平的人間しか／重んじないけれど。」という一節を受容して詩を書いた田村隆一に対して、大江が「田村隆一と垂直的人間」(『新潮』、一九六六・一一)という文章を著して賞賛していることから確認できる。

9 工藤昭雄『破滅の証言(現代イギリス詩人論)』(南雲堂、一九六二・五) 12頁。

10 同書70頁。

- 11 リチャード・ホガート、岡崎康一訳『晶文選書 51 オーデン序説』
 (晶文社、一九七四・一) 153頁。
- 12 渡辺一夫「狂気について」(『渡辺一夫著作集 10』、筑摩書房、一
 九七〇・七) 390—392頁。
- 13 大江健三郎「核時代のエラスムス」(『図書』、一九六八・八)。引
 用は『ヒロシマの光』275頁。
- 14 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』(岩波新書、一九六五・六) 183
- 15 同書 186頁。
- 16 同書 70頁。
- 17 C・D・ルイス、深瀬基寛訳『現代詩論』(創元社、一九五五・
 六)。
- 18 大江健三郎「異様な穏やかさ」(『新潮』、一九七〇・四)。